

## 序 文

本シンポジウム「コリアにおける日本研究の現在」は、国際日本文化研究センター海外研究交流室が企画している「日本に在住する外国人研究者を対象とするシリーズ・シンポジウム」の第2回目にあたる。第1回目は2000年3月に「バブル経済崩壊後の日本研究」というタイトルで、参加者を限定せず、広く呼びかけ開催した。この第2回は、日本に在住しているコリア研究者（いわゆる「在日」韓国・朝鮮人、そして日本に一時滞在している韓国人）と、コリアに関する研究を行っている日本人研究者をはじめ、日本の4年制大学で教鞭をとっておられる方々のほぼ総てに呼びかけを行った。かつ、2000年に韓国で発行された『日本を強くした文化コード16』の著者16名および韓国において日本研究を積極的に推進している中堅の研究者に手紙を送り、15名の研究者をお招きした。研究発表の報告については、上記の方々に希望を募り、希望された方の総てに、シンポジウムでの報告をお願いした。

本報告書は、そのシンポジウムで行われた報告のうち、「コリアにおける日本研究の現在」という課題に込めているものと総括討論をテープ起こししたものである。そのほかの報告については、日文研紀要『日本研究』等にご投稿していただくこととした。

コリア語圏（韓国語、朝鮮語）は、現在世界の中でも日本語学習者の人口が最も多く（第2位はオーストラリア）、比率も最も高い。そして、日本研究の水準も高い。日本との間に、過去に不幸な政治関係をもち、現在でも教科書の歴史叙述をめぐって議論が沸騰するような関係にあるが、そうした陰を宿しながら行われている研究の現在の状態について、冷静かつ穏やかな雰囲気のもとに、しかも活発に意見の交換をすることができたと思う。これは、ひとえに出席者の方々のおかげであり、深く感謝したい。なお、本シンポジウムは、いわゆる「教科書」問題が持ち上がる以前に計画し、かつ、実現したものであり、その問題にはふれていないことをお断りしておく。

日文研・海外研究交流室長 鈴木貞美